
或る物語

柚木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

或る物語

〔ZΠ-〕

N
8
5
3
3
P

【作者名】

柚木

【おひさま】

「……ダリア、お前のお役目は王妃の身代わりだ。どうか国のために死んでくれ」

帝国の由緒ある貴族・ドーラ家の一人娘ダリア＝ドーラは、たつた一人の主に全てを捧げた。

全ては至高の存在の為に。

……名を。誰かに、名前を呼ばれた気がした。

寝台と丸テーブルが一つだけある簡素な部屋。寝台ではなく床に座り込んでいた少女がゆっくりと目を開けた。そこから現れたのは深淵を湛えた、どこまでも深い青。

一度二度とまばたきを繰り返してから少女は立ち上がる。まだ幼さの抜けきらない顔と、年齢にそぐわない落ち着きのある眼差しと雰囲気。それらのアンバランスさは絶妙な均衡で少女の中に存在していた。

軽く頭を振つてから着替え、背を流れる墨色の髪を一つに束ねた。装具もほとんど無意識に身につける。窓に映る己を念入りに眺めて崩れているところはないか確認する。この部屋に鏡はなかった。

そうして身支度を終えると、少女は正面にある扉ではなく寝台の横にある隠し扉に身を滑り込ませた。厚い扉の向こうは完全な暗闇だつたが、少女が臆する様子はなかつた。

扉を慎重に閉めて、少女は部屋から出していく。扉は最後に少しだけ金具の音を立てた。その音だけが、少女が目を覚ましてから部屋を出るまでの間で唯一、部屋に響いた音だつた。

暗闇の中、速度を全く落とさず向かつた先は大理石の広間だつた。冷え冷えとした空間を統べるように空の王座が鎮座している。少女は自分の定位置まで進んで直立の体勢をとる。

しばらくすると鈴が擦れ合つような音を少女の耳は拾つた。小太

刀を前に置いてすぐさま膝をつき、頭を垂れて右腕を額の高さまで持つてくる。左腕は立てた膝に添えた。剣を持つ者としては最上位の敬礼である。

そして物々しい音とともに広間の両開きの扉が開いた。大理石の上を歩く音が静寂な広間の空間を破つた。音が止み、その内の一つが王座に座る。

「さて……どうじの時が来たわけだが、」

「顔を上げりや」

語り出した低い声を遮るように凛とした声が少女に投げ掛けられた。場は一時、先ほどの静寂を取り戻す。

少女は右腕を下ろし、顔を声の主へと向けた。声の主は美しい女性だった。少女の凧いだ海を湛える青と、それを見下ろす翡翠がぶつかる。

「ふむ、なるほどな。確かによう出来どるわ。」この国の技術者は優秀じゃの」

まるで物に対する評価に、少女は全く動じなかつた。同じくその場にいる他の人間も、誰一人として眉をひそめることもしなかつた。代わりに王座に座る男が口を開く。

「……あとで科学局に伝えよう、彼らも喜ぶ」

「しかしこの瞳は、我が姫に比べてちと暗いな。あの子はもっと綺麗な空色をしてある」

「光の中で見なければそう分からん。第一そんな間近で見られることがない」

まだ何か気にくわなそうな様子の女性を素つ氣なく切り捨て、男は少女に顔を向ける。

「お前は私たちを恨んでも致し方ないといひに……長い間よく励んでくれた」

どこか感慨深げに呟く男だが、その後ろに立つ男の面影を宿す少年は対照的だった。憎々しげに片頬を歪めて口を開く。

「これからがお役目の時だ。お前は優秀だと聞いた。その能力、十

一分に發揮して役目を果たせ」

その言葉に少女はただ、流れる動作で頭を下げる。

彼女自身の特徴的な、凧いだ海を思わせる瞳と同じくその心に揺れも迷いもなかつた。

「殿下の御心のまま」

春の初め。雪も溶けきつていない、ある朝の出来事である。

莊厳な鐘が帝国に鳴り渡る。

オスティマ帝国。世界の三分の一を掌握し、残りのうち半分とは実質支配関係と言える同盟条約を結ぶ地上の支配者。たつた一代で帝国の力をここまで広げたのは当代国王ハティク＝ジス＝オスティマ。若くして王位に就き、その若さと苛烈さを以て戦場を自ら駆けた獅子王は、その伝説の最後を飾るに相応しいことを成した。

どれだけ文献を漁ろうとも、たとえ属国以外の国の文献を見ようとも、彼の成し遂げたそれは偉業と称えられている。

彼について語るならばその偉業なくして語れない。そしてその偉業を語りたくば事の始まりから知らねばならない。歴史に埋もれた事実を、誰も結末を知らないその始まりを。

彼が偉業を果たす十年前、一人の少女が父親に連れられて城に足を踏み入れた。少女は幼くとも美しい顔立ちであったが、何よりもその瞳が印象的であった。深い青を宿すその瞳は、凧いだ海を相手に思い起こさせた。

少女の名はダリア。ダリア＝ディ＝ドーラ。帝国貴族ドーラ家の一人娘である。先日6度目の誕生日を迎えたばかりの娘だった。

ドーラ家は代々教皇に仕える一族だった。政と信仰が切り離された今であっても教皇の権威は一点のくもりもなく、教皇の厚い信頼を受けるドーラ家は指折りの貴族だった。

王宮の中とは思えないほど狭い部屋にダリアは通された。けれど部屋に掛けられた王家の紋章が織られたタペストリーや複雑な彫りが施されていいるオーク材の調度品など、どれも最高級のものだと見れば分かる。

ダリアは初めての登城とあって心を踊らせた。実家でも贅と職人の技巧が詰め込まれた一級品に囲まれて過ごしていたが、王宮はそれに勝る素晴らしいところだった。昔に途絶えた建築様式の城も、柱を埋め尽くす彫刻も、美しく整えられた薔薇園も。全てが少女を夢中にさせるに足る魅力を備えていた。

だが、ダリアは痛くなるほど手を握り必死に自制した。今日は朝から険しい表情をし、自分を一度も見ない父を横目に見上げる。やはりこちらには一瞥もくれない。

国王と謁見することしか知らされていなかつたが、幼心にただならぬ空氣を察したダリアは子どもとしての自分を殺し、ドーラ家の一人娘として立っていた。

……ダリア。

部屋に入つてから30分。少し待ちくたびれてぼんやりしていたダリアは自分の名前にすぐ反応出来なかつた。

「……ダリア」

「あ、ごめんなさいお父様。ちょっとぼーっとし

「お前さえ望むならここから逃がしてやることが出来る」

父は静かに、けれど焦燥を滲ませる口調で告げた。少女はやや物騒な言い回しに首を傾げた。一体何から逃げるのだろう。

「お父様？」

「あの御方を裏切るのは……しかしあ前さえ望むなら、私は……」

いつだつて意志を貫く顔立ちをしてダリアの前に立つていた父は、迷いのある表情で言い淀む。

何を、と問おうとしたダリアは遠くから聞こえてきた音にびくり

と反応する。ダリアは耳がよかつた。音は回廊を外れた狭い通路を進んでくる。この部屋に向かっているのは明らかだった。

「お父様、誰かがこっちに」

ダリアが教えてやると、父は一瞬顔を強張らせるが、次にはいつもの父に戻っていた。先ほどまでの迷いもその顔には見当たらない。父は膝をついて、少女にも促す。

言われたとおりダリアが膝をつくのと、扉が叩かれるのはほぼ同時だつた。扉は返事を待たずに関かれた。

父は頭を下げていたが、好奇心に負けたダリアは礼を忘れて入ってきた人物を見てしまった。そして寸でのところで驚きの声を飲み込む。父よりも少し若い男性と、彼によく似た少年……国王陛下と王太子殿下だ。やつて来たのはその一方とダリアの教育係の神官一人。そしてある「こと」が現教皇だつた。

無礼を承知で、でもダリアは頭を下げることが出来なかつた。自分を見る王太子の鋭い視線から逸らせなかつた。

「ダリア……陛下と教皇様の御前ですよ」

神官に静かにたしなめられ、慌てて礼の形をとつた。そんな少女を眺めてから神官は国王に非礼を詫びた。

「いや、いい。息子が殺氣を投げていたのが悪い。ドーラの娘、お前もそう恐縮するな」

それから顔を擧げるようになされ、父とダリアは直立の体勢に戻る。

何故、国王と教皇が揃つて自分を召喚したのか。この国では王家と教皇の力関係は複雑だつた。その一方が並ぶこと自体が異例と言える。しかし、理由はすぐに分かつた。教皇が重く口を開く。

「ダリア。まだ幼い貴女には少々酷だと思いますが、貴女のお役目が決まりました」

ドーラ家を始め、王家ではなく教皇側に忠誠を捧げる家の者に

は”お役目”が課される。それは次期教皇の世話役から、それこそ裏の仕事まで多岐にわたる。

ダリアも物心つくころにはお役目について言い聞かされていた。お役目を果たすこと。それが自分にとって全てであり、何よりの誉れなのだと信じて疑わなかつた。

少女にとつてまだ善悪の区別すらつかない時から刷り込まれた考えは、世界の摂理よりもずっと当たり前のことだつた。

だからお役目と言われたとき、少女の中では戸惑いより喜びの方が大きかつた。こんなにも早く果たすべきことが与えられるとは、夢にも思わないことだつた。

ダリアは両膝をついて覚えたばかりの印を手で切る。それはお役目を課されるときの儀式だつた。父は、いつの間にか部屋の隅に下がつていた。

教皇が一步前に出て、ダリアの額に手をかざす。耳鳴りがするほど空気が緊張した。

「ダリア＝ティ＝ドーラ。ここにアウスレーゼ＝ジス＝オステイマ
殿下の王妃の影を命じます。貴女に神々の祝福あらんことを

教皇が正式な祝詞 常人には聞き取れない音の羅列 を唱え、

元の位置に戻る。少女は目を開けた。言われた意味を正確に理解出来なかつた。

呆けている少女の肩を父である男が掴む。言い含めるように、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「…ダリア、お前のお役目は王妃の身代わりだ。どうか国のために死んでくれ」

実の父親からの宣告も、遠い出来事に思えた。少しづつ染み渡る

ようにも言葉は入ってくるが、未だ呆けたままの少女は諾の言葉を返していなかつた。

しかし次に聞こえた言葉で全ては終わった。

今まで一言も発しなかつた王太子が少女の前に出る。金砂の髪から覗く鷹の目。少女と2つしか変わらない少年は、絶対的な王者の眼差しで少女を見やり口を開く。

「ダリア。お前は私の姫に代わつて死ねるな」

それが、彼女が全てを懸けて尽くす唯一の主から賜つた最初の命令だつた。

……そして彼女がダリアと呼ばれる最後となつた。

静かに、まるでその瞳に導かれるように、ダリアの心は定まる。

「……ダリア＝ディ＝ドーラ、そのお役目有り難く頂戴いたします」

その時その瞬間、ダリアはダリアではなくなり、ただの影となつた。

名前を捨て、戸籍を捨て、顔を変えた。あらゆる毒の名前、武術、暗殺術を乾いた土が水を吸い上げるように会得していく。同時に指先の動き一つまで、今は遠い国で暮らす姫の動きを仕込まれる。

時は流れ、花は芽吹き、雲は切れ、運命はその歯車を組み合わせる。

その年は歴史的な年となるだろう。

かの帝国オステイマと、”聖都”ミコレイヒの婚姻。オステイマヨリは、鷹の王子が。ミコレイヒヨリは、歴代唯一の巫女姫が。ことはなく。

その婚姻は歴史的な婚姻となるだろう。
潜む謀略も、婚姻の裏で死んでいった一人の少女も歴史が明かすことではなく。

その物語は歴史的な物語となり語り継がれるだろう。もうひとつ

つの、誰も知らない物語を文字列の中に潜ませて。

莊厳な鐘の音が帝国に鳴り渡る。

帝国は、まもなく19になるアウスレーゼ殿下の結婚話に浮き足立っていた。

雪は峻嶺に残すだけの、暖かな春の陽気に包まれた帝都は賑やかだつた。あちこちに露店が並び、活気に満ちた人々の声が飛び交う。

冬明けを待たずして全世界に発表されたオスティマとミュレイヒエの結婚。それは当事国のみならず世界中に衝撃を与えた。帝国オスティマと言えば、今では圧倒的な権威を誇る大国である。その影響力は計り知れない。しかし、人々が注目したのは帝国だからではなかつた。

聖都ミュレイヒエ。巫女神信仰の総本山である。

この世界に宗教は数多くあれど、巫女神信仰は全世界共通のものだつた。数ある他宗教の全ても、元を辿ればこの信仰の解釈が枝分かれただけの話だつた。

この世界が混沌に沈んでいた頃、一人の女性が地に降り立ち今の世界を形成したという。その女性は強大な靈力と、神々に特別に愛でられて造られた美貌の持ち主だつた。彼女は神から遣わされた地上の女神であり、土の民、つまりこの世界で生きる人間全ての始祖と記されている。そして彼女が最初に降り立ち、眠りについた地がミュレイヒエである。今もなお彼女の力は彼の國で息づき、絶対的な神聖を保ち続ける。

これだけならば科学が発展し、魔法も不可思議な存在も夢物語となつた現代では一つの信仰で終わつただろう。しかしミュレイヒエには、女神の存在を裏付けるような事実があつた。

ミュレイヒエを統べる一族は女神の直系とされているが、数世代に一人は手の甲に紋様を宿して産まれる女児がいた。そして何かし

らの超常現象……主には癒しの能力だが……を引き起こす力があった。

彼女たちは女神の生まれ変わりと言われ、巫女姫として崇められた。

そして歴代隨一と尊られるのが当代巫女姫、ロゼッタ＝ラクアイアである。

その巫女姫が結婚、しかも他国に嫁ぐなど考えられないことだった。巫女姫は存在そのものが神聖。不可侵の領域を侵すこととは暗黙の了解のうちに禁忌とされてきた。

だからこそ、今回の結婚は重大な意味を持つ。この結婚によって帝国が得る力の大きさに危機感を抱いた者もいよいよ。しかし大半の者は神々の逆鱗に触れるのではと危惧した。それだけ巫女神信仰は絶対的だった。一部の熱狂的な信者は神への冒涜と言つて憚らなかつた。わざわざ山を越えて帝国にまで直訴しに来た輩もいるぐらいだつた。

もちろん帝国の民衆も不安を覚えたが、それよりも巫女姫が自国に来ることを単純に喜んだ。

このように、良くも悪くも一国の結婚は大きな反響を呼んだ。

帝都が活氣づいている限り、城では巫女姫を迎える準備で大騒ぎだった。いよいよ当日になつた今日は特に城全体がそわそわしていた。

お披露目は三日後。さらにその後一週間はミュレイヒ側の段取りとやらを踏み、一日後に正式な誓いの儀を執り行う。その前に帝

国の暮らしに慣れてもらつ意味で、入国が今日となつた。到着は昼過ぎのことだった。

城が昼に訪れる巫女姫の為に奔走している時、影は近衛隊長と共に謁見の間にいた。国王と王太子、そして四人の神官を従えたミュレイヒエの女王と、昼に到着とされている巫女姫本人が上座に座っていた。

「何とか無事に入国は出来たな。気付かれた様子はないな?」

「はい、疑いを持った様子はありません。」彼らにも目立つた動きはなく、気付かれてはないと

「そうか、まずは上々だな。あとは入国のパレードか。……最初の任務だな」

近衛隊長と国王のやり取りの後、最後に国王が投げ掛けたのは影に対しての言葉だった。影はゆっくりとまばたきだけをして返事をした。不敬にもなりうる素っ気なしに国王は鷹揚に笑う。その影も、次に投げ掛けられた言葉にはすぐさま最上の礼をとった。

「お前は巫女姫の名を借りるのだ。くれぐれも失態を犯すな」

王太子の、主の命令をしつかりと胸に刻み付ける。

そして一瞬だけ巫女姫の方に顔を向ける。一人の顔は瓜二つで、ただ青い瞳の彩度だけが異なっていた。凧いだ海を思わす深い青の瞳が、不安げに揺れる晴れた空色の瞳に對して安心させるように少しだけ細められる。

「はい、全では滞りなく

そしてもう一度礼をしてから、影は静かにその場を退出した。

広々とした廊下に一人分の足音が響く。近衛隊長の男は周囲に視線を飛ばすが、人つ子一人見当たらない。けれど影と呼ばれる先ほどの者がいるのは分かつていた。自分ですら聞き取りにくいほど声を潜める。

「……今日動くとしたら一般の信者くらいだろう。過激派で知られる南の民が大勢入国している」

”彼ら”的情報は掴めてないが、事を成し遂げたいなら今日は見送つても問題ない……むしろ効果的に事を成すなら誓いの儀と踏んでいた。

「しかし、だからこそ気を付ける。暴徒と言えども一般信者を傷つけては心証が悪い」

そこまで言つて、耳をます。相変わらず物音一つ聞こえない。そのうち人々が行き交う回廊に出た。時間も迫つていて、影は任務場所に向かつただろう。

「巫女姫様の影か……氣味が悪い」

最後に独りごちて、自らも任務に向かつた。

入国パレードは盛大に行われた。巫女姫をこの目で見ようと通りには人が押し寄せけが人も出たが、國が危惧するような事件は起きた。巫女姫は御簾越しにしか見れなかつたが、まさしく女神の如く美しい方だつたと酒場で人々は盛り上がつた。初日は至つて平和なものだつた。……表向きは。

「手練れのナイフ使いか、山向こうでは投げナイフを得意とする部族がいなかつたか」

「しかしあの地域はこの手の毒を調合できる材料がない」

「やはり”彼ら”が動いたのか？」

「警告のつもりでしょう。ナイフに塗られた毒も大したものでは」

城の地下にある大部屋では黒装束の集団が静かに話し合つていた。

目の下ぎりぎりまで黒で覆われた彼らの顔は判別できない。

その中で、影はひたすら沈黙を貫いていた。中央の台に乗せられたナイフを何の感慨も見当たらない瞳で見つめる。

パレードの最中、一時だけ花火が上がった。花火は火薬。つまり武力。争いが絶えないこの時分には金銀よりも貴重なもので、どんなに豊かな国でも花火は珍しかった。そして民衆が空に目を奪われたその瞬間、一本の投げナイフが警護と御簾をすり抜けて巫女姫を乗せる御輿の中に襲いかかった。

しかし中に乗るのは巫女姫の影であつたし、その周囲には帝国が誇る精銳部隊 通称『鴉』が控えていた。誰にも被害はなく、犯人はすぐに捕まつた。唯一の失態と言えば、問い合わせる前に犯人を死なせてしまつたことである。犯人は鴉に追い詰められるや否やあつさり自害してしまつた。

「何の情報も引き出せなかつたのは痛手でしたね」

「それが信者の厄介なところだ。一般人だろうと巫女姫様のためなら簡単に死んでくれる」

「”彼ら”と断定するには材料が欠けるな」

「”彼ら”だろうと一般信者だろうと……」

「もういいだろう」

それまで黙つていた影が議論に終止符を打つ。

「どのみち決定的な動きがあるのは誓いの儀。それまで姫様を守り、より正確な情報を集める。それだけだ」

では、私は護衛に戻る。そう言って影は部屋から消えていった。鴉たちも音もなく闇に紛れしていく。後にはただ、二対のナイフが残された。

東の空が白く色づいていく。巫女姫入国の翌朝、幾分か冷え込む空気は帝都全体を薄く包む霧を生み出していた。その霧を引き裂くよつに街を駆ける三つの影。ひたすら逃げる二つを深海を宿す黒い追撃者は鋭く追い詰めていく。

距離がある一定にまで詰めた瞬間、すかさず仕込み針を飛ばす。前を走る二つのうち一つは崩れ落ちるが、片方は次の建物に飛び移つた。しかし影は狼狽えることなくもう一度腕を振るう。一歩一歩と足を進めた後、逃亡者はその場に伏した。指一本動かすどころか呼吸すらままならない強力な痺れ薬に苦しむそれを眺め、胸から呼び笛を取り出す。特殊な訓練を積んだ者にしか聞こえないその音に、霧の中から姿を現したのは鴉の一人組だつた。確認するよう一人が頷き、それぞれ地に倒れる逃亡者を気絶させてから肩に担いで再び霧の中に飛び込む。影も息一つ乱さず己を待つ主の元へ向かった。

「姫様の部屋に入り込んだ賊は捕らえました。後のこととは鴉が」「最低限の、それでいて最高級の調度品が置かれた一室、王太子殿下の自室で影は膝をついていた。

日も昇りきらない早朝だというのに隙一つない装いで報告を聞いていた王太子は、腕を組んで影を見下ろしていた。完璧な無表情で、ただその鷹の目だけが冷たい怒りに燃えていた。

「それで」

低く平淡な問いかけに、影は氣付かれないよつに奥歯を噛み締めた。分かつてている。たとえ一人を捕らえたところで口のしでかしたことには変わらない。

「お前は私の姫の部屋に侵入を許したのだな。新しい環境で不安に怯える姫に、お前は迫る危険と恐怖を現実に突きつけた、と？」

弁明を許さない追及に影は頭を下げるしか出来なかつた。そもそも弁明する余地などない。

「……申し訳ございません」

「謝れば済む問題か。舌の根も乾かぬうちに失態を犯すとは。父上に誉められて付け上がつたか？お前の主は誰だ」

「アウスレーゼ殿下です」

問い合わせに影は間髪入れず返した。頃垂れる顔を上げて主に向けた。睥睨するような眼差しをくれる鷹の目を、深海の青が挑むように見つめ返す。

「……ならば、私の名に恥じない働きをしてみせる。今は姫の元へ行つて支えとなれ。それも含めて影の役目だらう」

影は一度も表情を変えず、静かに言葉を聞き入れていた。そしていつものように音もなくその場を辞した。

巫女姫の部屋に向かう最中、影は己にあらんかぎりの呪詛を吐く。先ほどのやり取りが脳裏に浮かび、目の前が暗くなつていいくような気持ちだつた。主の期待に、自分は応えられなかつたのだ……。自責の念よりも純粹な嫌悪感が内側を苛む。表層に出すほど愚かではなかつたが、瞳の青はどんどん彩度を無くしていった。

目的の部屋の前まで辿り着き、一度深呼吸をする。帝都を駆け巡つても乱れなかつた息は、少しだけ荒くなつていた。控え目にノックをし、鴉での識別番号を口にする。出迎えた鴉と入れ替わつて部屋に入った。

部屋で待つていた姫の表情は、元より白かつた顔から更に血の気を無くして真つ青だつた。目の前に置かれた、気持ちを落ち着かせるスイートオレンジの紅茶に口をつけた様子もない。それを見て、ようやく影は彼女に対して罪の意識を持つた。

何たることか。自分が失態を犯したことばかりに田を向け、それまで一度もこの姫を案じなかつた。守るべき、この世で最も神圣な御方よりも自分の気持ちを優先していたのだ。瞳から、一段と彩度が失われた。

姫が自分を認めて立ち上がるうとするより前にその場に平伏し詫びた。僅かな衣擦れの音から姫の動きを把握していたが、影は平伏したまま待つた。……無視されても、夜までこの体勢でも、受け入れるつもりだつた。

そつと姫は影の前に膝をつく。ほつそりとした指が影の顔に触れた。影は身動き一つしない。

「……顔を。顔を挙げてください」

鈴を転がすような軽やかな声が耳朶を打つ。近距離で同じ顔が互いに向き合つた。二つの直視するのも憚れるほど神々しい美貌。

けれど、全く違う。

影はそう思つた。自身を映す、恐怖を滲ませながらも慈愛に満ちた蒼天が輝く。その美しさは、どんな穢れも寄せ付けないほど眩しかつた。紛い物。初めて貌下に会つた日、耳許で囁かれた言葉が蘇る。本当、なんて美しい御方だろう。影と呼ばれる自分はなんと身の程知らずなことか。

「……けがをしていますね」

白い指が床についた手の甲をなぞる。何てことはない。賊を追つている最中、木の枝で軽く切つただけだ。お披露目の当田までにごまかせる程度には治る。

影は顔にだけは決してけがを負わないよう教育されてきたが、他の場所なら日常茶飯事だった。

「いいえ、大したことは。姫の代わりを勤めるのに支障はありません」

安心させようとそう告げたのに、姫は痛ましげに眉を寄せた。影は理解出来なかつた。本当に問題ないと言葉を重ねる。けれど姫は一層顔を歪ませた。

「…………」「めんなさい」

小さな口から零れた謝罪は泣き声に近かつた。突然のことにして、影は表情こそ完璧なポーカーフェイスを保つていたが珍しく狼狽した。本当に訳が分からなかつた。そして次の瞬間、今度こそ影は驚きに目を見張る。

姫の手が傷口に翳されたかと思うとその部分が熱を帯び、瞬きの間に傷が完治していた。痕も全くない。

女神の生まれ変わり、奇跡の御力 :

言葉が出なかつた。話には聞いていたが実際に田の当たりにするのでは事情が違う。お礼の言葉を忘れて影は己の手をまじまじと見つめる。

どうして姫は自分などに……驚愕と困惑を処理しきれない影を、姫の細い腕が包み込んだ。清廉なフリージアの香りに、影は抱き締められていると知る。

「本当に、『めんなさい』。わたくし、わたくしのせいで、貴女は……」

久しぶりに触れる人の温もりはひどく懐かしかつた。胸が熱くなる。何故だろう。情など、もう思い出せないほど遠い昔に捨てたはずなのに。

あの日自分は教皇ではなく王太子を主と定め、鷹の人全てを捧げた。かつての信仰心などもう残つていない。巫女姫だって、王太子から命じられたお役田だから守るに過ぎなかつた。

「それでも。今はただ、この優しすぎる姫に笑っていてほしいと、心から思った。」

陽の光が部屋に入り込み始め城内も帝都も活気づいていく中、その部屋だけは穏やかな静寂に満たされていた。

影は護衛の傍ら、姫が望むように姫の話に耳を傾け、姫の隣に留まつた。影として度を越した行いではあつたが、姫の支えになれといつ主の言葉を思い出した。

ことあるごとに柔らかく微笑みかけられる。姫は影に対しても惜しみなくその美しい微笑みをくれるし、けがをした者を見れば躊躇いなく奇跡の力を使う。女神の生まれ変わりというのは伊達ではない。

影は姫の笑顔に陰りが薄れていくこと自体は嬉しかつたが、自身に向けられる暖かさを居心地悪く感じた。姫の周囲は眩しくて清らかで、息苦しくなる。

城が寝静まつた深夜、影は自室で武具の整備をしていた。髪をおろして顔を覆う布を外した姿は巫女姫そのものであった。

愛用する小太刀、毒を塗つた仕込み針、身体中に仕込む何本ものナイフ、布術用の布……不備はないか、数は揃つているか。機械的に作業を進める。

ある時、影の手が止まる。先ほどから薔薇園の方角で音が聞こえてくる。風かと思ったが、それにしてはやけに方向性がある気がした。

気のせいだろうか？影の超人的な聴力でも、さすがにこの部屋から薔薇園は遠い。

しかし考えたのはほんの一瞬で、すぐに黒装束を身に纏う。整備中の武具を最低限備えて薔薇園に向かった。

人のいない夜の薔薇園は、静謐な雰囲気を漂わせていた。だが。

いるな……

気配がするだけで四……五人。それと微かに聞こえる不自然な音も合わせて考えると多くて七人。城に忍び込むにはいささか多い。目的を見極めるためにもしばらく見張つていたかつたが、うち二人が姫の部屋に向かっていたのでそうもいかなかつた。

まずは姫の部屋に向かう一人。痺れ薬を塗り込んだ仕込み針を飛ばす。近くの一人もすぐに黙らせた。そのまま薔薇園を音もなく駆けるが、影は突如足を止める。

……後方に一人、左手に一人と右前方に一人。

視線も動かさず状況を把握する。気づかれたのが早すぎる。特に落ち度はないつもりだつたのだが。

「鴉と言つても大したことないと思つてましたが、なかなかどうして鋭いのがいたものですね」

一人の青年が影の前に姿を見せて朗らかに笑つた。

影は表情こそ無のままだつたが、最高ラインまで警戒心を高める。声をかけられるまで全く察知できなかつた。

アノニマス。そこに居ない者。『彼ら』……巫女姫親衛隊の中で最も危険人物。

情報を頭の中から引っ張り出す。影はこれが好機か否か判断しかねた。いつでも応戦できる状態で目の前の青年を注視する。一方青年は場に似つかわしくない透明な笑みを浮かべた。

「任務に忠実なところ申し訳ないです、今日は騒ぎを起こしたくないのです。」

見逃してもらえますね？

有無を言わせない笑みに、影は何も言わず腕を振るつた。次瞬青年の頬に一本の赤い線が走る。それが示すものは、拒絶。唯一覗かせる凪いだ海の瞳を見つめて、青年は楽しそうに口の端を持ち上げた。

「……いいでしょう、今日は退きます。双方にとつて重要なのは誓

いの儀ですしね」

あつさりと計画の一部を明かす。まるで止められるなら止めてみろと言わんばかりの口振り。そんな挑発を無視して、影は一言だけ言葉を発した。

「……浅はかな」

その言葉が終わると同時に、左手に潜んでいる男が倒れた。全員がそれを認識するよりも前に鴉たちが音もなく降り立つ。

弾かれるように残りの男たちが散っていく。それを追う鴉。青年も肩を竦めてから地を蹴った。別の鴉が追跡するのを確認して、影は姫の部屋に走る。

しかし姫の部屋には先客がいた。

「殿下」

小さく呼び掛けると、穏やかに眠る姫の傍らに座る王太子が顔を上げた。

「お前か……」

囁く声に影は部屋を出ようとした。この部屋を護衛していた鴉がないないということは、王太子が人払いしたのだろう。けれど王太子は手でその場にいるよう指示する。影は部屋の角に身を置いた。

「招かれざる客がいたようだな」

一人言に近い咳き。影はこれまでの経験から黙つて聞いていた。そつと王太子が姫の顔にかかる髪をのけてやる。

「目障りな。姫の顔色もだいぶ良くなつたが、まだその心労は量り知れない。無粋な客には早々に退場願いたいものだな」

姫の艶やかな墨色の髪が指に絡められてはすり抜けて落ちる。影は主の要求を汲んで目を伏せた。お役目を全うしなくてはならないのに、今の己のなんて未熟極まりないことか。

「もう遅い。報告は朝改めて聞く」

王太子はゆっくり立ち上がり、眠る姫の顔を見つめてから足早に扉に向かう。影の方には視線すら寄越さないで扉を開けた。王太子は扉を閉める前に一度だけ視線を影に向かたが、頭を下げる影は気づかなかった。

翌朝、影たちは再び地下に集まつた。あの後逃げた三人は鴉によつて捕まつたが、その中に例の青年はいなかつた。そして予想外の事が起こつた。

「昨夜捕られた者たちですが、殺されました」

瞬時、空気が緊張する。

捕られた者たちを容れた牢の見張りを近衛に、鴉は牢獄塔の周囲を見回つていた。そして朝になつてみれば、昏倒した見張り番と首をかつ切られた死体が発見された。これには鴉たちも平静を保つのが難しかつた。パレード、巫女姫の居室への侵入、そして今回の殺害……苛立たしい思いを否定できない。影も眉を寄せた。

結局、収穫は”彼ら”の計画が誓いの儀で実行されることとの確信と、尋問して聞き出した「藤花の段」という単語のみ。影は膝どころか両手をついてしまいたい気持ちを堪えながら主に報告を済ませた。

「……どうか、『苦労だつた』

何の色も含ませず王太子は答えた。外を眺める横顔しか見えないが、もともと鋭い瞳が更に細められる。

「誓いの儀でどうこうしたいのならば、それまでは情勢を荒げたくないだろ？と思うが……警戒しどくに越したことはないな」影も頷く。

「鴉は近衛隊の監督を希望しています。出来れば指揮系統を鴉の下

に

「掛け合つてみよう」

それから、と王太子は視線を影に向ける。

「彼ら」に直接接觸した感想は「

「おそらく大半は大したことありません。近衛でも上級隊士なら対応できます」

そこで一度言葉を切る。まだ青年と言つていい、あの男……

「ただ一部は鴉でなければ手に負えないでしょう。更に限られた中には相性によれば鴉でも……苦しい、かと」

「お前にそこまで言わせるとはな。アノニマスだつたか?」

「……彼と正面から対峙となれば、姫様を護衛しながらという状況は避けるべきと思いました」

感じたことをそのまま伝える。お役目そのため、力が足りないことを嫌でも認めなければならない。

「…………」

王太子が机を指で叩く音が部屋を支配する。鷹の目が、ここではない何処か遠くを眺める。

「今日のお披露目だが、姫本人に立つていただくことにするか」

影は思わず主を凝視した。お披露目もだが、民衆の前に出るときは影が代行する手筈だった。

「姫も外に出た方が気分も晴れよう。相手も今日は動く可能性が高いとは言えないしな」

王太子は淡々と言葉を紡ぐ。

「夜の姫の護衛は続ける。だが誓いの儀の一日前までお前は好きに動け。影でも鴉としてでもなく、私の臣として」

それは、何かしらの成果を出してこいといふこと。

深海に意思の煌めきを宿し、影は一礼した。

「承知しました」

王太子が頷き視線を戻したとき、部屋にはもう王太子しか残つていなかつた。

微睡む意識の中、名前を呼ばれた気がして影は意識を浮上させる。そこが慣れ親しんだ自室だと理解して壁から身を起こした。ゆっくり手で目を覆う。

……まだ。最近、名前を呼ばれる錯覚の回数が増えた。それは隙あれば自分を呼ぶ。懐かしいような、恐ろしいような……けれど何と呼ばれているのか、そもそも名を持たない自分を真実呼んでいるのか分からぬ。何故呼ばれたのが自分だと思うのだろう。

深淵を漂う思考を中断する。習慣となつた準備を手早く終わらせ外へと駆けた。

謁見の間では国王と王太子、そして鴉の一人と近衛隊長が話し合っていた。王太子が、国王に近衛の指揮権全てを鴉に委譲するよう提案したのだ。

これに異論を唱えたのは近衛隊長である。当然だろう。清廉潔白を信条に掲げる近衛隊は、暗殺業を主とし全容そのものが公開されていない鴉をよく思っていない。そんな鴉に指示されるなど隊士の誇りが許さない。命令を無視する隊士も出てくるだろう。と隊長は主張し、国王もそれでは難しいかと顔をしかめる。

そんな隊長に対して、何を思ったのか鴉が肩を揺らした。
任務に私情を挟むとは、さすが近衛隊は気高くていらっしゃる。

それは本当に小さな咳きだつた。しかし大理石の部屋にはよく響いた。あからさまな挑発に隊長は顔を真っ赤に染めたが、掴みかかることはなく上座に向き直つた。

「そこで提案なのですが、鴉の指示を私が受けて隊に伝えるというのは?私の指示として」

「それでは時間がかかるだろうが」

「しかし殿下、これなら隊に不満を与えず済みます。鴉の指示をより確実に遂行するなら」

王太子はこの提案に思いきり不機嫌な顔をしたが、国王はただ鴉に意見を問うた。鴉は隣の男を暫し眺めた後、了承の意を示した。

そうした裏がありつつもお披露目はつつがなく事を終えた。

レースをしていたが顔を出した巫女姫を観衆は熱狂的に迎えた。姫も疲れの色は残っていたが晴れやかな笑顔を見せた。横で穏やかに見守る王太子と二人並ぶ姿は、どんな名画よりも絵になっていた。

華々しい表舞台の一方、影は帝都中を走り回っていた。“彼ら”的ものと思われるアジトを見つけ侵入した。“彼ら”以外のグループの人間は縛つて情報を聞き出した。近衛隊のあの男に知られたら苦い顔をされるだろう。

城内も隈無く調べた。城には鴉が使う隠し通路があり、今ほど重宝したことはない。

そうして得た情報の中には興味深いものもあった。それでも決定打は掴めないまま、ミュレイヒエ側の段取り、曰く神儀も折り返しの日となつた。今日は禊の洗礼を執り行う。帝国の人間には理解出来ないが、どうやらその洗礼をもつて正式に帝国に『入つた』ことになるらしい。

影は早朝から街で情報を集め、一旦城に戻つた。その際料理人たちが使う勝手口を通りかかり……ふと、違和感を感じて視線を戻す。建物に隠れて周囲を注意深く見れば、すぐに違和感の正体は分かつた。違うのだ、近衛の配置が。鴉が指示したものと。

目立つほどではないが、念のため報告しようと影は身を翻す。

禊の洗礼は厳かに行われた。聖都の神官が大勢並び、讃美歌が大気を震わす。帝都の教会も教皇まで総出で立ち合つた。強烈な白、それでいて無個性な神官服を纏う人間が一人くらい列から外れても、特別気にする者はいなかつた。

人のいない道を一人の神官服が歩く。ゆつたりとした足取りで、今にも鼻歌を歌いかねないほどリラックスしている。歩調はそのまま、酷薄な笑みに歪んだ口が開いた。

「殺氣をそれだけ当てといて無言はないでしよう。ここは近衛隊の警護が来ませんし……出てきたらどうです？」

「……近衛には、ここ巡回も指示してあるはずだ」 神官服の青年……アノニマスは、突然現れた影に剣を突き立てられても笑みを崩さなかつた。

「愚問ですね。私がこの場にこうしているのが何を意味するのか、分かつてているでしょ？」

言われてすぐに思い浮かぶのは、勝手口で鴉の指示と違つ配置の近衛たち。そして報告を受けた鴉の言葉。

他にも数カ所、配置を変えられています。出来た穴を搔い潜れば今日の神儀の間に紛れ込めますね。

そして、鴉の指示を変えられる人物は……

「ああでも」

青年が思い出したように声をあげた。

「牢獄塔を鴉が見張つているのには参りました。あの一人は親衛隊員ではないのですよ。手引きしたのは我々ですが……巫女姫様を敬う同志、一応助けてやろうと思いましたけどね」

あの日、姫の部屋に侵入した賊からは大した情報を得られなかつた。その理由は、”彼ら”ではないから。

しかしたとえ口車にのせられただけの一般信者でも罪は罪で、またそれを知らない鴉が容赦するわけがなかつた。鴉の拷問を受けた

二人は瀕死の状態。その二人を今、あつさりと笑顔で青年は見捨てたのだ。

だが影も聖人君子ではない。その事実には特段気にかけず、目の前の青年に集中する。この青年は危険だ。この場で捕らえるか、最悪でも深手は負わせたい。

一方の青年は落ち着いている。そうですねえ、と暢気に呟いて手を口元に当てた。

「こちらとしてもあなたには興味があります。ですが神儀の最中に流血など御法度。そこでです」

指を天井に向かつて立てて、青年は言葉を続けた。

「いいことを教えましょう。誓いの儀で私は直接、巫女姫様に”御挨拶”します。何処よりも神々に近いところで」

止めに来い。言外に告げられ、影は目を細めた。罷だろうか。青年の意図を推し量りかねる。

「ではこの辺で失礼しますか。もう少し巫女姫様を見ていたかつたんですけど」

「……私から逃げ切れると？」

一拍置いて、風が起くる。すでに二つの白と黒はその場から消えていた。

青年を追つて城外に出た影に、ナイフが襲いかかった。青年以外にも外に控えていたようだつた。追跡は緩めず一つを小太刀で弾き落として手に拾う。懐にしまい、代わりに自分のナイフを飛ばし驚異の正確さで迎撃者たちを仕留める。

帝都の中ほどまで追つたところで、突如青年と影の間を色とりどりの風船が割つて入つた。下では子どもたちの喜ぶ声がする。帝都のあちこちで行われている大道芸だつた。また視界が開けたときは青年を見失つていて、影は仕方なく城に戻つた。主に報告することがあることが、唯一の救いだつた。

神儀を終えて執務室に戻った王太子を待っていたのは影だった。

王太子は驚いた様子もなく席に着いて、目で報告を促す。

影はアノニマスの言葉をそのまま伝え、追跡中に手に入れたナイフがパレード時のものと同じだったこと、近衛隊の警備配置のこと、他の信者がどうやら”彼ら”に煽られていることを伝えた。多くの情報を見聞きして、巫女姫を暗殺する意味も推測した。

「どうやら信者にとって、巫女姫が帝国に嫁ぐことはその神格が失われることを意味するようです。俗世に降る、と」

「それでその神格が失われる前に殺してしまえと？ 極端だな」

「殺害を日論んでいるのは”彼ら”だけでした。聖都は今、土地が衰えてますから。失うならば巫女姫を供物にという算段では？……神聖を無くした巫女姫が耐え難いだけの可能性もありますが。他は事件を起こして帝国の面目を傷つけたいようです」

「どのみち巫女姫暗殺は確実か。こちらの想定通りだな」
皮肉げな笑みを口の端に型どつて、王太子は頬杖をつく。

「それと近衛の件ですが……」

「ああ、小汚い鼠がうろついているな。牽制は必要だが、あまり大事にしたくない。泳がせておけ」

「鼠……密告者、裏切り者。”彼ら”に通じる者が意図的に警備の配置を変えているのは間違いない。そしてそれが出来る人間は一人だけ。影の目蓋の裏に、近衛服に身を包んだ生真面目な男の顔が浮かんだ。

「承知しました」

報告を終えた影は姫の護衛に向かった。藍と橙の混じる黄昏の空では、半円の月が白く輝いていた。

神儀の間、夜の姫の護衛は影が全て担当した。そして毎夜王太子は姫の部屋を訪れた。まだ誓いの儀を果たしていない以上、王太子と姫は必要最低限の会話しか許されていない。影なりに気を遣つて退出しようとするのだが、その度に止められて姿勢を正すのも毎夜のことだった。

王太子はただ黙つて姫の横に座るだけ。静かに姫の寝顔を眺める王太子の雰囲気は穏やかだつた。ただ口増しに複雑な色が瞳に宿るのを影は疑問に思った。

禊の洗礼以降、”彼ら”は不気味なほど沈黙を守つていた。

鴉は裏切り者、近衛隊長の男には牽制の意味で鴉の一人を隊長が率いる個隊に入隊させた。察したのか、その後の近衛の動きは鴉の指示に従つていた。それでも誓いの儀当口は保証できないことに違ひはないが。

そして、神儀も最終となつた夜。護衛についていた影は、突然現れた鴉に護衛の交代を知らされた。そのまま王太子の自室に行くよう指示され、戸惑いはあつたがすぐに向かつた。

影は王太子の部屋の扉をノックする。夜の廊下には昼以上によく響いた。誰何の声に答えてから扉を開けて部屋に入る。任を解かれて呼ばれた動搖を感じさせない滑らかさで膝をついて言葉を待つた。

「突然呼び出した用件だが……誓いの儀の前夜、お前の任務は全て解く

「全て、ですか」

「何、お前を信頼していいわけではない。父上が発案者だが、最後にゆつくり過ごさせてやりたいとのことだ」

……最後。影の最大にして本当のお役目である、誓いの儀での影

武者役。

影は皿蓋をぎりぎりまで下ろし、少しの間床を見つめる。それからしつかりと頭を下げた。

「勿体ないお気遣い、ありがとうございます」「立ち上がり、もう一度頭を下げる。そして退室しようとした影の目に空っぽの花瓶が留まつた。空ということ以上に装飾を嫌う王太子の部屋には似つかわしくなく、影は動きを止めて見つめてしまつた。「ああ……」影の視線の先を追つた王太子は、お前は本当に夜田がきくなと笑つた。

「……申し訳ありません。では私はこれで失礼します」

「気になるか?」

すぐさま身を翻そうとした影は、その問いかけにゆっくりと主へ向き直つた。詮索すべきではないと思っていたから、主が問うた真意を量りかねた。

振り返れば背後に白金の月を従え、こじらを真つ直ぐに見つめる鷹の目と目が合つた。

その姿を見て、この御方は本当に生まれながらの王なのだと改めて実感する。ほとんど無意識に膝をつき、頭を垂れる。主の真意は分からぬ。でも主が会話を許しているなら知りたいと思う。慎重に口を開く。

「失礼ながら、殿下にしては珍しい、と。……花をお生けには?」

一時、沈黙が二人の間に落ちる。影は頭下げていたから、主がどんな表情だつたか見えなかつた。しばらくして、空気が動いた。椅子が軋む音で主が花瓶に近いソファに腰かけたのだと察する。

「一輪……昔な。確かに美しく咲いていて、ただの切り花のくせにそれは見事だつた」

だが、と王太子は自嘲気味な吐息をもらす。

「花が落ちてしまったんだ。やけにあつけなかつたな」

そう呟く王太子の声はひどく平淡なものだった。影は話の行き着く先が分からず、ただ黙つて耳を傾けるしかなかつた。

「『』の花瓶に生ける花は一つだけだと決めている。それがない今、この花瓶にはさして意味はないのかもな。その花はもう一度と私の手に戻つてこないのだから」

「……殿_下が手に入れられないものなど私には想像できませんが」「そんなことはない。本当に欲しいものは、ただの一つだけて掴めなかつた」

肩を揺らして王太子は答えた。無力な己に対する侮蔑と僅かな苦い思いが、影にも伝わってくる。王太子は手を田線の高さに掲げた。「私には、何もない。鷹の王子と言われても獅子王たる父上に遙かに劣る。自分の無力さには嫌になるな」

「そんなことはありません。私はずっと見ておりました。殿_下は誰よりも王たるに相応しい御方です」

影は勢いよく顔をあげて、珍しく饒舌になる。語る言葉にも熱が入つた。代わりに王太子の声はより一層冷えていく。

「それが幻想だと、私がお前にそう思わせているだけだと何故思わない。私がお前から何を奪つたのか、忘れたのか。本当は恨んでいるだろ？」「……」

「……殿_下からば、多くのものを頂きました。感謝しております」

本来なら『えられるはずもないのに、個室が用意された。整形のとき、瞳の色だけはそのまま残された。お前の色だと主に言つてもらつた色。

いくらでも治療できるのに、影の顔が傷つくことを禁じられた。唯一の王太子直属の臣下という、これ以上ない身分を授けられた。姫と同等の教養をと、貴族が受けるような教育も受けさせてもらえた。

それら全てが主の指示だと知っていた。

他にも多くの……身に余る幸せを頂戴してきた。最高の誉れであるお役目をもらつた。優しい姫と穏やかに笑い合う主を見ることが

できた。十分だった。満たされていたはずだ。これ以上何を望むと
いうのだろう。恨むわけがない。

「そして、殿下はこの帝国を統べる御方です。全ては殿下の手に」
真摯に答える影をじっと王太子は見つめる。影は濃く襲ってくる
畏敬の念に視線を逸らしそうになるが、耐えて次の言葉を待つた。
鷹の目と称される、世界を見渡す瞳は数瞬だけ虚空を漂い、再び
焦点が定まったときには強い光を灯していた。

「……そうだな」

ぐつ、と口角を上げて笑い、王太子は立ち上がる。

「そうだったな。失ったなら、また捕らえればいいだけの話だ」「
……そして一度と逃れられないよう、鎖で縛つて、閉じ込めるの
もいい。

王太子は一心に自分を見つめる影の前まで寄ると、徐にしゃがんで視線を合わせた。影はただ主を見つめ、次の言葉に耳をします。相変わらずその瞳は凧いだままで、迷いも疑いも、何一つない。それを満足げに確認した王太子は”その名”を呼んだ。

「ダリア」

影は最初、何と言われたのか分からなかつた。

「……ダリア」

主が肩をつかみ無理矢理立たせた時も、せいぜいあの花瓶に生ける花を自分に命じているのだろうかとしか思わなかつた。

「私の……俺だけの、ダリア」

主の瞳の奥で昏い炎が揺らめくを認めて、漸くその名がかつての自分の名であつたことに思い当たつた。

そしてそれを理解するよりも前に、熱く柔らかな感触に口を塞が

れたのを感じた。それは鳥が戯れるように一度二度と唇を啄む。

「ダリア……」

窺い知れない感情が籠められたその名前を聞きながら、己の首に顔を埋めてくる主を、熱い吐息を、影……ダリアは呆然と受け止めていた。

月の光が静かに部屋へ入り込む。強く己を抱き締める腕が緩んでも、ダリアは王太子の顔から視線を逸らせなかつた。たつた今自分の身に起こったことを処理しきれない。

幼子のような無防備さで見つめてくるダリアに対し、王太子は両頬を包み込んで真っ直ぐ視線を返した。深海の奥に自分が映つていることを再確認する。そして最後にもう一度、ゆっくりと唇を重ねた。それが離れると、王太子は背を向けてソファに身を預ける。

「護衛は別の鴉に任せである。今日はもう部屋へ帰れ。あと一日だ、氣を抜くな」

それは先ほどとは違い、耳に馴染んだ厳しい主の声だった。

ダリアは一度だけ目を閉じ、次に目を開けたときには完全に忠実な影と戻っていた。深く礼をし、今度こそ部屋を出る。

部屋に戻った影は、いつものように武具の整備を始めた。ひたすら機械的に正確に、武具の一つ一つを確かめていく。その手に淀みはなく、いつもと全く変わらない時間で作業を終える。新しい黒装束に替えて、結い上げている髪を下ろす。その時ほつれ一つないはずの髪がやや乱れているのを知つて、指先が震えた。しかしそれも一瞬のことと、水を張った桶と櫛で手早く髪を整えて全て済ませた。小太刀を抱え、定位置の床に座り込む。相変わらず物音をほとんど立てず、そのまま浅い眠りについた。

そうして夜は更け、朝を迎える。
誓いの儀は明日に迫っていた。

鴉はきつぎりまでより正確な情報を集めた。それらを合わせて”彼ら”のアジト、隊員全てを割り出していく。

影は姫の護衛をして一日を過ごした。

そして瞬く間に時間は過ぎていく。姫は一日中落ち着かなかつた。いつもの笑顔が消え失せ、影と日が合つとすぐに瞳を伏せる。月が一番高い位置で輝くとき、ついに影は姫の護衛を別の鴉に任せ、護衛任務を終えた。結局今日は一言も話さないままだった。挨拶も出来なかつたが、仕方ないと納得する。

影は薔薇園を通つて部屋に帰ることにした。最後にあの美しい薔薇たちを見たかつた。誰もいない薔薇園に足を踏み入れる。入り口で鴉の一人と行き合つた。それは師だつた人だと分かつたが、お互い会釈も何もしないですれ違う。

「……私はとても惜しいと思っているのですよ」

不意にかけられた言葉に、影は足を止めて振り返つた。鴉は近くの薔薇を見下ろしたまま言葉を続ける。

「貴女は鴉としても王太子の臣としても、これ以上ない逸材です。貴女ほど殿下に忠誠を捧げた者はいないでしょう」

もちろん私も忠誠を誓いましたけどね。小さく笑うその人を見て、影は不思議な気分だつた。この人にも感情があるのかと、当たり前のことを意外に思う。

「だからこそ、貴女を憐れに思います。貴女は揺らがない、迷わない、疑問すら抱かない。それは貴女の美德であり優秀さを示す最たるものです。けれど」

そこでいきなり言葉を切つて、軽く頭を振る。

「……いいえ、忘れてください。もう貴女の運命は変えられない。今、私が貴女に望むのはただ一つ。……どうぞ、そのまま。心のままにお役目を果たしなさい。」

その言葉を最後に、鴉は闇に溶けていった。一瞬目が合つた気もしたが定かではない。最後の師事を胸に、影は誰もいない闇に一礼してからその場を去つた。

部屋に帰れば習慣化している武具の整備を始める。明日は巫女姫として立つわけだから本当に最低限、仕込み針一本で十分だつた。けれどいつものように武具の一つ一つを手にとつてきれいにしてやる。むしろいつも以上に念入りに行つた。

明日忍ばせる仕込み針用に調合した猛毒を針に塗り込み、薄膜で慎重に針全体を覆う。光を反射せず、人間の血液に反応して溶ける特殊な膜である。

最後に愛用の小太刀を手にとる。刀身に自身を映すと、深い青がこちらを覗き込んでいた。それと目が合つと、脳髄にあの声が響いた。いつも自分を呼ぶ、謎の声……一日前から一層近く聞こえてくる。もう、隣で話しかけてくるようだつた。額に手をやる。頭が割れると思った。誰。一体、誰が……

……ダリア。もしお前が望むなら、私は

強くつむつていた目を大きく開く。細く鋭く息を吸い込んだ。

……ああ。思わずその場にしゃがみこみたくなる。何故、忘れていたのだろう。……何故、思い出してしまったのだろう。

遠い記憶が蘇る。自分よりも少し薄い青の瞳を持つ壮年の男。かつて父と呼び敬愛していたその人。何時だつて厳しく、でも何時だ

つて自分を見守ってくれた。

そう、あの時も。あの人は言つてくれた。たとえ気の迷いだとしても、彼にとつての至高の主を裏切つてまで手を伸ばそうとしてくれていた。

自分は何て愚かなのだろう。父も、師も、姫も。心を向けてくれた周りになど見向きもしなかつた。ただ王太子だけを見ていた。自分の世界には王太子しかいなかつた。

それで、それだけでよかつた。

思考を中断して忘れたはずの感情が芽生えるのを押し殺し、束の間の休息をとる。夜明けはすぐそこだつた。

高らかにラッパ音が鳴り響く。朝から帝都は色とりどりの紙吹雪が舞い、人々の目を楽しませた。世界中が注目する誓いの儀が始まろうとしていた。

侍女たちが訪れるよりも早く、巫女姫本人は鴉による厳重な警護のもと、誰も近寄らせないようにしてある安全な部屋に避難した。影は代わりに巫女姫として侍女を出迎え、儀式の支度を進めていく。影の振る舞いは完璧で、侍女たちすら疑わなかつた。

墨色の髪を複雑に編み込み、結つていく。さすがに化粧の時は目を閉じて深海の瞳を隠した。黒装束とは正反対のきらびやかな、上質なドレスを身につける。纖細な刺繡が施されたそれは柔らかく光沢を放つて美しかつた。最後に宝飾で飾り立てれば、まさしく彼の女神を思わせる花嫁姿の巫女姫がそこにいた。

侍女たちは感嘆のため息をついたり、中には感極まつて泣く者も

いた。誰もが花嫁に向かつて印を切つて頭を垂れ、聖句を呴く。

そんな中、近衛隊士を従えて正装した王太子が迎えに来た。王太子は花嫁を眺めてから無言で手を取つて部屋を出る。照れ隠しだと侍女たちが微笑ましく思いながら送り出した。

誓いの儀は所詮形式的なものである。しかし対外的にも伝統的にも、この儀式を以て正式な夫婦となつたことを示す大事な儀式だ。各国から賓客を招き、お披露目のときよりも大々的に行われる。

しかし何と言つても一番の見せ場は、聖塔の上で交わされる誓いの口づけだろう。教会よりも高い建物が禁じられているので、塔の上とは言つても民衆の位置からでも様子がよく見える。ほとんどの者は国王や賓客の口上を聞きながら、その瞬間だけを今か今かと待ちわびていた。

……そして、影も。影だけではない。鴉も”彼ら”も。息を潜め、その時を静かに待つっていた。

空を突き抜けるファンファーレが、一際大きく鳴り響いた。ざわついでいた場に完全な静寂が訪れる。花婿花嫁が腕を組んで塔の階段を登る。誰一人として言葉を発さず、固唾を呑んで見守つていた。

そして最上部に到達し、二人が向き合つ。まず王太子が誓いの詞を唱えた。次いで、影が誓いの詞を唱えるために口を開き……

聞こえた音が何か判別する前に、影はほとんど反射で王太子の肩を押した。王太子がたたらを踏んで一二三歩離れたとき、二人の間に白い塊が落ちてきた。その塊の中から硬質な光が伸びて、影の胸に沈んだ。

それは劇的で、それでいてひどくあつけなかつた。

何か、分厚いものを突き抜ける鈍い音を聞いた。

押し出されたよつに空氣の塊を吐き出す。血の混じつたそれはこぼりと喉の奥で鳴つた。

一拍遅れて悲鳴をあげる民衆。

怒声をあげる近衛隊士。

鴉たちは親衛隊の一斉検挙を始めた。

影の耳はそれら全てを余さず拾つた。ただ、近くにいるはずの王太子からだけは何の音も聞こえなかつた。

目の前で狂つた愛情に顔を歪める青年を見つめる。巫女姫への盲信が、その瞳と思考を曇らせていた。

静かに、あまりにも自然に。影は猛毒の針を青年の喉に埋めてやつた。その何気なさに、青年は何をされたかすぐには分からなかつたようだ。首を傾げて喉元に手をやり、それからやつと驚愕の表情でこちらを見上げる。

影はといえば刺されているとは思えないほど落ち着いた眼差しで見返した。その凹いだ瞳を、何よりも深い青を見て気づいたのだろう。震える口が何かを言おうと開かれるが、そのまま何も言えずに青年は絶命した。こちらに崩れ落ちてきたが、影は王太子に腕を引かれ寸でのところで避けた。鷹の目が細められ、片頬だけがひきつるような笑みで歪められる。

「貴様になど、どちらの巫女姫だつてくれてやらいん

影は、もうほとんど見えていなかつた。視界が黒くぼやけていく。先ほどまであんなに煩かった様々な音も全く届かない。静かだつた。胸の痛みは増していくが、気にならなかつた。今まで一番、心が

安らぐのを感じた。そのまま逆らわず、慣れ親しんだ闇に自らの全てを委ねた。

純白の花嫁衣装が赤く染まつていいく。青い瞳は固く閉ざされていた。王太子は温度を無くした指先を温めるように手を握り、どこか穏やかな表情を浮かべる従者をずっと眺めていた。

下で見ていた者たちは、あの時の二人ほど神聖で美しいものはなかつたと言う。その後も王太子夫婦は並べば絵になると評されたが、どの絵師も当時の二人の姿を最も描きたがつた。けれど王太子が描くことを禁じたので、この世に深海の青を宿す巫女姫と王太子が寄り添う姿は一枚も残らなかつた。

殺害を企てた親衛隊は鴉によつて一人残らず捕まつた。巫女姫の亡骸は聖都の禊の泉に安置されたことだった。巫女姫の死は世界中が見ていた。誰もがこの世の終わりのように嘆いた。しかし衝撃的な事件の一日前、更に驚かせる事態が起つた。

帝国が、誓いの儀のやり直しを発表したのだ。

どうしたことなのかと、再び帝国に入りきらないほどの人が押し寄せた。世界中が注目する中、王太子と手を取り合つて現れたのは亡くなられたはずの巫女姫だった。顔色は化粧でも誤魔化せないほど悪かつたが、それでも生きてそこに立つていた。聖都の女王陛下が前に進み出る。

事件当日の夜、姫を眠らせた禊の泉から眩い光が溢れ、自分は女神の声を聞いた。そして光の中から傷一つ無い姫が出てきたのだ。

これは、女神の奇跡。神々からの祝福である。此度の結婚、全ては女神の御心なり。そう、貌下は高らかに締めくくつた。

静寂が降り、聴衆が呆けていたのはほんの僅かで、すぐに大歓声が帝国を包み込んだ。世界中が歡喜した。女神様は、やはり私たちを見守つてくださっていた。なんて素晴らしいことだらう。歴史上唯一の神々の祝福を受けた誓いが成されたのだ。

反対派の信者たちも誰もが、認めざるを得なかつた。この結婚を歓迎した。その日は至るところで鷹の王子と奇跡の巫女姫のために祝杯が挙げられた。

そして聖都と帝国が手を結び、世界は統一への大きな一步を進んだ。獅子王と鷹の王子は平和の為に尽力し、よく治めた。世界はより多くの幸福に満たされることとなつた。

全ては事実であり、神々が起こした奇跡の結婚話はこれで終わる。

9 end .

獅子王が帝国を治めていたころ。帝国がその栄華を極めたころ。ある一人の、名を持たない少女が死んだ。その少女は存在しない人間だった。存在を許されない人間だった。少女に関する全ては残っていない。

彼女の死後、一握りの者たちだけでひつそりと、彼女は誰も来ない森の奥に埋葬された。名を刻まれることもないし墓標もない。ただ、王家が所有する森には深紅のダリアが一輪だけ咲いている場所がある。

王太子と巫女姫は、その生涯を終えるまで仲睦まじく暮らした。王太子、その時には国王陛下の死後、空の花瓶1つだけが王妃の手によって棺に入れられた。王妃はその後半年ほど生きてから安らかに眠りにつく。そして世代は変わりどれほど世が移ろうとも、森には一本の赤いダリアが変わらず咲き続ける場所があつた。その場所の意味も、花に籠められた想いも今は誰も知らない。華やかなダリアはしかし、ひつそりとその花弁を広げ咲き誇る。それは、栄華を極めた帝国が滅ぶその時までずっと変わらない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8533p/>

或る物語

2011年8月16日23時10分発行